

さっぽろ閑話「大正7年の博覧会と札幌の都市発展」

佐藤 真名

はじめに

本稿は平成29年(2017)2月4日に実施した、さっぽろ閑話「大正7年の博覧会と札幌の都市発展」を解説するものである。大正7年(1918)、北海道開拓開始50年目の祝賀事業として「開道五十年記念北海道博覧会」が開催された。その主要会場となった札幌区では、博覧会に向けた様々な都市整備や取り組みが行われた。閑話は、その事業内容を当館の所蔵資料を用いて解説するとともに、それらの事業が札幌の都市や市民に与えた影響を考察し、その後の札幌の都市発展との関わりを示すことを主旨とした。

閑話の構成(【表1】)と各章の概要は次の通りである。まず、[はじめに]で閑話の主旨の説明を行った後、導入として博覧会のために行われた事業をひとつ例に挙げ紹介した。[0]で「博覧会」の一般的な定義と開催の意義を確認したのち、[1]で閑話の主題である開道五十年記念北海道博覧会の概要と、博覧会開催の提唱や準備段階の動きを、当時の新聞や報告書等を用いて解説した。[2]では、博覧会の助成組織である「札幌区協賛会」が実施した、博覧会に向けた都市整備や取り組みのいくつかを具体的に紹介した。[3]はまとめの章として、開道五十年記念北海道博覧会の入場者数を紹介した後、[2]で解説した博覧会の為の都市整備や取り組みが札幌に何をもたらしたのかという考察から、大正7年の博覧会がその後の札幌の都市発展を後押しする役割を果たしていたことを示した。最後に[4]で博覧会顧問による札幌の都市と市民を評価した新聞記事を紹介し、記事中で語られる「札幌という誇りある都市」を今後も継承していくためには何が必要であるかを参加者へ問いかけた。これに対して「記録」そのものの重要性と、記録の保存管理や市民への提供等を行う公文書館の機能が重要な役割を持つのではないかと、という筆者の意見をむすびの言葉として閑話を終了した。本稿では、閑話では時間の関係で簡潔に述べた部分に対し新たに資料や解説を補足しつつ、構成に沿って内容を紹介する。

【表1】

さっぽろ閑話 「大正7年の博覧会と札幌の都市発展」構成	
	はじめに
	閑話の主旨
	博覧会のための都市整備の一例
0	博覧会とは？
1	開道五十年記念北海道博覧会
	1.1 博覧会のテーマと目的
	1.2 博覧会の開催の提唱
	1.3 博覧会の会期と会場
	1.4 博覧会に向けて～札幌区の計画
	1.5 博覧会の準備～協賛会の設立
2	札幌区協賛会～実施した事業の内容紹介
	2.1 協賛会とは？
	2.2 札幌区協賛会の事業
	2.2.1 店頭装飾と市街装飾
	2.2.2 旅館・宿泊所の設置と改善
2.2.3 名所・旧跡を紹介する図書・絵はがきの刊行	
2.2.4 大会の開催の勧誘やその補助	
3	大正7年の博覧会が札幌に残したもの
	3.1 博覧会の入場者数
	3.2 博覧会が札幌に残したものは
4	むすびに
	博覧会顧問：菅野真氏の新聞記事の紹介
	公文書館の役割～記録を残すこと、伝えること

[はじめに：閑話の主旨、博覧会のための都市整備の一例の紹介]

閑話の主旨を説明した後、導入として電車(電気軌道)の整備事業を紹介した。明治期より馬鉄(馬車鉄道)が札幌区内の枢要地域を運行していたが(【資料1】)、輸送力の弱さや衛生面の悪さについてかねてより指摘を受けていた。開道五十年記念北海道博覧会の開催決定に伴い、馬鉄を廃止し電車を運行させる計



資料 1 明治45年、停車場通りを走る馬鉄。正面のはるか奥に写っている建物は札幌停車場。



資料 2 大正7年の博覧会期中、停車場通りを走る電車。資料1とは逆方向から撮影。

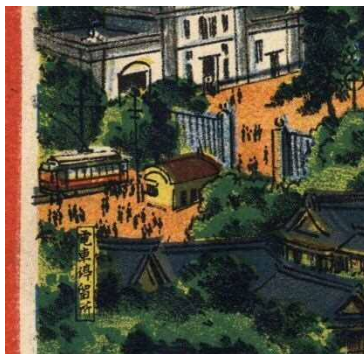


資料3 開業当時の電車の路線
(『札幌案内』掲載地図に加筆)

画が進められた。大戦の影響による資材調達の遅延等により、当初の運行開始予定日であった博覧会初日には間に合わせることができなかったが、会期中の8月12日より運行を開始した²(【資料2】³)。

開業当時の電車の路線は3路線であった(【資料3】)。中でも、札幌停車場(現在のJR札幌駅)と博覧会の第一会場である中島公園間を運行した「停公線」は、観覧客を大量に輸送する大動脈として大いに活躍した。中島公園会場を描いた当館所蔵の絵図「開道五十年記念北海道博覧会第壹会場全図 其一」(【資料4】⁴)には、公園のそばに設営された電車停留所と電車に乗降する人々の姿が描かれている(【資料4】拡大図)。博覧会後は、札幌の都市の発展に伴い電車の利用客数は増加し、電車軌道も延長されていった。そして、昭和2年(1927)には札幌市が事業を買取り、電車は市営事業となった。

都市における交通機関は、都市の発展とともにそれまでの手段を超えた輸送力や生産性が求められ、それに呼応するように発達を遂げていく。明治37年(1904)に「札幌石材馬車鉄道合資会社」が設立され、同42年から営業を開始し、札幌の都市交通の第一歩を踏み出した。大正7年に誕生した電車は、バスや地下鉄、市電などの現在の市営交通機関へと続く発展の一過程を示しているといえる。



【資料4】破線部拡大図



資料4

「開道五十年記念北海道博覧会第壹会場全図 其一」

[0. 博覧会とは?]

開道五十年記念北海道博覧会の理解を深めてもらうため、主題に入る前に「博覧会」の定義等についての解説を行った。

博覧会とは産業や学術、文化等の普及や振興を目的として、会場内に生産品などの実物や標本、パネル、模型などを展示し、人々に公開する催し物のことである。博覧会には必ず固有のテーマと目的が設定される。近年の博覧会を二つ例に見ると、昭和45年(1970)に大阪で行われた日本万国博覧会(通称:大阪万博)のテーマは「人類の進歩と調和」で、国の開発力や産業をPRすることを趣旨とした。また、平成17年(2005)に愛知で行われた日本国際博覧会(通称:愛・地球博、愛知万博)は「自然の叡智」をテーマに、環境問題や人と自然がいかに共存していくかなどの、人類の共通課題の提唱とその解決策を提示し普及することが目的であった。

博覧会に類似する催し物に「共進会、品評会」「見本市」などがある。いずれも物品を陳列し展示することは共通するが、共進会や品評会は成績品の陳列という意味合いが強く、品物を審査しその優劣を競わせることで産業技術の向上を図ることを趣旨としており、見本市は出品物の売買や取引のための見本陳列に主眼が置かれる催し物である⁵。これらの性質から、共進会、品評会、見本市の観覧客は、生産業者や販売者、専門家、企業、研究者などが中心である。博覧会がこれらの催し物と大きく異なる点は、観覧客が市民を含む広く一般の人々を対象としているところにあると言える。



資料5 盛況の中島公園会場の様子。観覧客の中には、子供を抱く女性や、男児の手を引く学生帽の少年などの姿が見られる。

開道五十年記念北海道博覧会は共進会、品評会、見本市の要素も含んでいたが、展示物や装飾の工夫、パビリオンの建築意匠、音楽の演奏会や演芸会等のイベントの開催など、一般市民も楽しめるように構成されていた。『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』⁶に掲載されている中島公園会場内を写した写真【資料5】では、多様な観覧客の姿を確認することができる。

[1. 開道五十年記念北海道博覧会]

次に、閑話の主題である開道五十年記念北海道博覧会の概要と、博覧会の開催の決定や準備段階の動きについて解説を行った。

(1.1 博覧会のテーマと目的)

大正7年(1918)は、明治2年(1869)に開拓使が設置され「蝦夷地」を「北海道」と改称してから50年目に当たる年であり、この節目に合わせて記念博覧会を開催する計画が立てられた。博覧会は「北海道開拓開始50年目を祝賀すること」をテーマに、北海道の50年の開拓の経過と殖産振興や道路交通、経済等の現況や成果を全国に紹介すること、今後のさらなる進歩や発展を図ることを目的とした。

(1.2 博覧会の開催の提唱)

記念博覧会開催の提唱は、大正2年(1913)に新聞や雑誌記者による組織「札幌記者倶楽部」⁷より発せられた。11月11日の北海タイムス⁸に、次のような決議内容が掲載されている。

決議 来る大正七年は開拓使設置後五十年に該当す 此機会に於て開道五十年祭を挙行之が紀念として相当の事業を計画し本道五十年間の進歩と拓殖の現状とを内外に紹介すると共に人心を作興するは極めて緊要適切な挙と認め極力其遂行を期す

(旧字体を新字体に改めた他は原文のまま。以下新聞記事の引用は同様。)

また、同記事には開道50年目を祝するための3つの記念事業を行う旨が提言されている。この記念事業とは、①大々的な記念祭を行うこと、②記念祭と一緒に記念博覧会を開催すること、③北海道史を編纂することの3つである。このうち②の「記念博覧会」が開道五十年記念北海道博覧会にあたる。

札幌記者倶楽部は同年12月11日に道庁を訪れ、北海道庁第12代長官・中村純九郎氏に対して記念事業に関する申し入れを行った⁹。これに対し中村長官は賛成の意を述べたが、大正3年度はすでに予算が決定しているため、翌大正4年度の予算編成においてそれぞれの事業を協議・調査の上、相当の計画を立て経費を計上すると回答した。

その後、大正4年の通常道会の協賛を経て、大正5年度以降の4箇年継続予算をもって博覧会を開催することを決定した。大正5年2月12日には、諸規則や博覧会施設に関する多数の協議・研究を要する事項を決定するために「博覧会準備委員会規程」を定め、同時に委員16名と書記2名を任命した。同年7月23日に「博覧会事務規程」を發布し、博覧会準備委員会は廃止され、以降は事務分掌に基づき各事務委員が担当することとなった。開催までの具体的な動きを簡潔に述べると、大正5年に評議員の嘱託、陳列館そのほか施設物の工事設計、出品の勧誘、協賛会組織の諸活動などに従事し、さらに大正6年度には会場敷地の整理、陳列各館及び付属建物の建築に着手するほか、各府県などに対する参考品の出品及び観覧客の勧誘のため、全国各県への委員の派遣や博覧会のテーマや目的等の

趣旨が記載された「開道五十年記念北海道博覧会開設趣旨書並計画大要」の配布を行うなどの準備が進められた¹⁰。

(1.3 博覧会の会期と会場)

前述の博覧会準備委員会において特別委員を設け、内外博覧会規則を参酌し大正7年の博覧会に最も適当な規則を立案した。さらに、委員総会においても数回にわたる審議研究の上、博覧会の会期や会場をはじめ施設や出品についての詳細を決定し、大正5年9月13日北海道庁告示第589号にて「開道五十年記念北海道博覧会規則」を発布した¹¹。

博覧会の会期は、8月1日から9月19日までの50日間であった。8月15日には、第一会場中島公園内の式場で「開道五十年記念祭」を挙行政した¹²。これは前述(1.2)節の、札幌記者倶楽部の提唱した3つの記念事業の①にあたる。当日は、来賓や拓殖功労者とその関係者など1000余名の参加者が集い、拓殖功労者に対する賞状と記念銀盃の贈呈が行われた¹³。

博覧会の会場は3か所に設置された。第一会場には札幌区中島公園、第二会場には札幌区北1条西4丁目(停車場通沿い)、第三会場には小樽区営第二埋立地が選定された。次に札幌区の2つの会場について、事務報告¹⁴を参考に解説する。

第一会場：中島公園(【資料4】を参照)

中島公園は札幌区の南に位置する公園で、園内は広大で樹木が各所に点在しており、西方には鴨々川の水流が巡り、清らかな池があり、風光明媚な逍遥地として名声が高い場所と認識されていた。また、公園内には「北海道物産陳列場」の建物があり、ここを展示場として使用することが可能である。さらに、博覧会開催までには馬鉄を廃止し電車の開通を予定している。これらの理由から、博覧会の第一会場として最適な場所であるとして、大正5年10月に土地の管理者である札幌区に会場使用の承諾を得たのち、整備等の準備が進められた。中島公園内の北海道物産陳列場の建物は、博覧会中は「農業本館」として利用された。北海道物産陳列場は博覧会後に移転するが、建物はそのまま中島公園内に残され「集会場」として利用された。

第二会場：北1条西4丁目(停車場通沿い)(【資料6】¹⁵)

前述のとおり、第一会場に充てられた中島公園には北海道物産陳列場があった。この建物は元々、明治20年(1887)に「北海道物産共進会¹⁶」のための会場として建設されたものであるが、産業振興のためには全道および全国の農工業等の生産品を収集陳列し、それらを一般の人々が通年自由に閲覧することのできる施設が必要だという考えから、

明治21年に常設の陳列場である北海道物産陳列場として開場した。同建物は常設展示のほか、小規模の博覧会や共進会、品評会の会場としても活用されていた。しかし、交通機関の不便から冬期間は閉鎖されたため、当初の予定とは異なり実際に開館されていたのは毎年4月15日から11月15日までの期間であった。このことから、通年開館が可能な地へ移転を求める声が高まり、検討の結果、北1条西4丁目の札幌区立女子尋常高等小学校跡地が選定された。ここには博覧会の第二会場となる「工業館」を建設し、博覧会後は同建物を新たな北海道物産陳列場へ充当した。この北1条西4丁目の北海道物産陳列場は、昭和9年(1934)に施設の老朽化などの理由から取り壊され、跡地には札幌グランドホテルが建設された。

このように、博覧会後の利用も考慮された上で、各会場の設定や建築物の建設が行われた。



資料6 「開道五十年記念北海道博覧会第二会場付近之盛況 其二」

(1.4 博覧会に向けて～札幌区の計画)

2つの会場が札幌区内に設定されたことを受け、当時の札幌区長・阿部宇之八氏は大正7年1月1日の北海タイムスで¹⁷、北海道の中心都市として札幌区は責任を持って博覧会に臨み、札幌の都市の問題を解消するため各種の整備を行うと語っている。以下に、記事の一部を引用し紹介する。

[…略…] 本年の札幌区の問題は何であるかと通観すれば依然当面の問題としては将に來らんとする博覧会と関連して諸般の準備施設であらう。謂う迄も無く吾札幌区は博覧会の開催地たるを以て無慮幾万の各府県來賓紳士

を迎ふべく随つて本道十一州の首都として以外更に其責任の重にして且大なるを感ぜねばならぬ筈である […略…]

また、札幌区民に対しても博覧会への協力が呼びかけられた。同日掲載の別の新聞記事¹⁸には、次のように記されている。

[…略…] 然るに本年は会期迄に僅かに七カ月其間に於て遺憾なく其の設備を完成するには今後一層当局の奮励を要するのみならず道民も亦熱誠之が成功に援助せられんことを望む特に主催地たる札幌区民は一段の注意を拂ひ火防衛生は勿論市街乃至店頭之の装飾、宿舍の改善等を図り、外来観覧者をして快感を得せしむるは最も緊要のことたるを信ずるものなり […略…]

この文中の「快感を得せしむる」は、観覧客に対して「おもてなしを行う」と言い換えることができるだろう。博覧会に向けて札幌区は官民一体となって準備を行うよう呼びかけられたが、それに応えるために交通や旅館などの改善や、区民に対する講習会や講演等を行うなど、様々な分野での都市整備や取り組みが計画された。

(1.5 博覧会の準備～協賛会の設立)

博覧会会期中は、道内外から多数の観覧客が札幌へ集中することが予想された。博覧会を成功させるため、観覧客の誘致のためのPR事業、興行や娯楽イベント等の企画運営、来賓の接待、諸施設の整備、市街の装飾など多数の事業を計画し実行した。札幌区におけるこれらの事業は「札幌区協賛会」という組織が中心となって行った。

[2. 札幌区協賛会～実施した事業の内容紹介]

[2]では、札幌区協賛会が実際に行った事業のいくつかを具体的に紹介した。

(2.1 協賛会とは?)

「協賛会」とは、博覧会の補助事業を行うために設立された組織である。大正5年12月16日に行われた博覧会評議会において、統一的な事業が行えるよう全道を区域とした「北海道博覧会協賛会」を組織し、その下部組織として札幌、小樽、函館、旭川、室蘭の5か所に地方協賛会を設立した。

【表2】

札幌区協賛会 事業一覧

	事業名称
1	歓迎門の建設
2	市街装飾
3	案内所の設備
4	手荷物預かり所の設置
5	共同宿泊所の設備
6	旅館の設備改善
7	市街掃除、散水
8	救護班の設備
9	祝い袋の発行
10	記念絵葉書の発行
11	印刷物の刊行・配布
12	各種大会の勧誘・補助
13	興行場敷地許可
14	煙火(花火)
15	提灯行列興行
16	来賓接待

(2.2 札幌区協賛会の事業)

当館の所蔵資料『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』¹⁹には札幌区協賛会の行った主な事業として、16の事業が報告されている(【表2】)。その中からいくつかの事業を抜粋して、当館の資料を用いて解説を行った。

(2.2.1 店頭装飾と市街装飾)

① 店頭装飾

事業の一覧表には店頭装飾の項目はないが、「2. 市街装飾」に報告がある。札幌区協賛会は、札幌区内の商店の根本的改善による経済の活性化を図ることを目的として、講習会や協議会の開催を行った。

閑話では、大正5年に開催した「店頭装飾講習会」について、当時の新聞記事を用いて解説を行った。講習会は札幌区と札幌商業会議所が主催となり、11月5日の北海タイムスで札幌区内の店舗の経営者や従業員に対して講習会への参加者を募集している²⁰。

これまでの商品の販売方法は、良い品物を安く売ることが最善の策とされていたが、個人商店の増加や五番館、丸井今井百貨店などのデパートの誕生といった当時の札幌区の背景から、店頭の装飾や商品の陳列方法の工夫によって客の購買意欲を高めることに重点が置かれるようになっていた。講習会では、商品の陳列方法や店内装飾の改善、店舗の建築意匠や構造の改善、看板の修理改善、市街地の商業地域の整備など、幅広いテーマが取り上げられた。

この時の店頭装飾講習会の講師は、東京美術学校(現東京芸術大学)の元教授である菅野眞氏が担当した²¹。菅野氏は博覧会に非常に見識の深い人物であるとして紹介されており、開道五十年記念北海道博覧会の顧問としても活躍した方である。菅野氏は博覧会の準備のため何度も来札し、滞在中は様々なテーマで札幌区民に向けた講習会や講演会を行っている。



資料7 丸井今井呉服店 札幌支店外観。左上に開道五十年記念北海道博覧会のスタンプが押印されている。

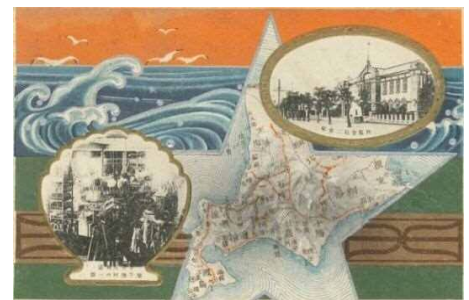
市内の写真が使用されており、商品陳列の様子を確認することができる。

博覧会顧問の菅野氏は、店頭装飾について最も注意を払うべきは、色彩の配合、明暗の関係、色彩に伴う寒暖の感覚であり、街並みの色彩と自然の色彩の調和を大切にすべきであると語っている²⁷。ちなみに、近年札幌市では「札幌市都市景観条例」(平成10年4月施行)に基づき平成12年(2000)に「大規模建築物等景観形成指針」を定め、一定規模以上の建築物等の新増改築や大規模修繕、外観の過半の色彩変更などを行う場合の届け出を制度化している。

さらに、平成16年には調和のとれた魅力的な都市景観をつくり出すため、色彩分析や研究を重ねた上で札幌の景観色として最も適した70色を選定し、「札幌の景観色70色 大規模建築物等色彩景観ガイドライン」²⁸を策定した。店頭装飾講習会の講習内容からは、当時より都市全体の景観や色彩環境に配慮する意識が存在していたことが伺える。



資料8 写真左は今井呉服店階上の商品陳列の様子。写真中央は博覧会第一会場全景。写真右は博覧会中島公園会場正門。



資料9 写真左は今井呉服店階下の商品陳列の様子。写真右は博覧会第二会場。

② 市街装飾

博覧会の主会場となる都市を装飾することの意義について、菅野氏は「一つは来客を歓迎するため」、もう一つは「都市をPRするため」に必要であるとしている²⁹。札幌区協賛会では、札幌の玄関口である停車場駅前に壮麗な歓迎門(【資料10】³⁰)を建設したほか、市街地の街路の両側に装飾を施した。協賛会は札幌区土木課と再三の協議を行い、装飾の原案を決定した³¹。装飾は一〜五等級に分けられ、一等装飾はさらに甲乙種に分けられた。各祭典区委員と打ち合わせの上、割り振られた等級の装飾内容に沿って街路装飾が実行された。また、割り当てのなかった街路にも協賛会が示した装飾の標準に沿って任意で装飾を実施させた。全体の統一感を出すため、設置物の色や形、サイズなどのデザインの細かな装飾規定が定められた。新聞によると、一番壮麗な装飾である一等装飾甲種が施されたのは停車場通りとある。そのルートは、停車場通りを南へ進み南1条で東へ入り、西3丁



資料10 札幌区協賛会が札幌停車場前に設置した歓迎門。奥に見える建物が札幌停車場。手前には電車(電気軌道)のレールが見える。

そのルートは、停車場通りを南へ進み南1条で東へ入り、西3丁

目をさらに南に進んで、南7条で西4丁目に戻り中島公園会場の正門までであった³²。当時の地図上に、一等装飾甲種のルートを示したものが【資料11】である。資料には参考までに停公線の軌道も記している。

停車場通りの装飾の具体的内容は次のとおりである。街路の両側5間ごとに高さ16尺末口3寸のペンキを塗った丸太による装飾柱を立て、間に1インチ大の紅緑のモールを飾り、紅白の防水金巾を張る。金巾の中間3カ所を絞りあげた部分へは、紫地に白い道章北斗星を染め抜いた三角旗を垂らす。柱頭には国旗や紅白の三角旗、電灯を掲げ、国旗や三角旗の下には金色のエナメルを塗った木製の星飾りを、電灯の下には日の丸の幡旗を飾り、これら3種類の装飾柱を交互に立てる。この街路装飾の様子は、停車場通りの写真【資料12】や、絵はがき【資料13】³³、「開道五十年記念北海道博覧会第二会場付近之盛況 其二」【資料14】より確認することができる。



資料12 【資料2】拡大図。停車場通りの街路装飾の様子。



資料11 市街装飾(一等装飾甲種)設置箇所と停公線軌道
(『札幌案内』掲載地図に加筆)



資料13 第二会場前の街路装飾の様子。



資料14 【資料6】拡大図。絵図に描かれた第二会場前の街路装飾。

また、菅野氏は装飾事業の一環として区内の清掃を励行した³⁴。当時の札幌は、道路がきちんと整備されていない個所が多かったため、塵やホコリが舞っていた。加えて、落書きも多かった。特殊の装飾について苦心するよりも、まずは区内を清掃し衛生面での改善を図ることが先決であり、博覧会の会期中に都市の清掃を続ければ区民の良い習慣となり、かつ、ほかの都市に対しても良い模範を示すことができると主張した。市街の清掃については「7. 市街掃除および散水」に報告があり、ゴミの運搬の迅速化を図るための馬車の増便、清掃人の増員、街路散水を行う人員の確保などを行っている。さらに菅野氏は区民各戸に対しても、塵やホコリの飛散を防ぐための散水を積極的に行うよう呼び掛けた³⁵。

(2.2.2 旅館・宿泊所の設置と改善)

博覧会のために来札する多数の観覧客の宿泊所を確保する為、区内の旅館の整備改善や共同宿泊所の設営を行った。

① 旅館・宿泊所の整備と設置

札幌区協賛会は観覧客を、来賓者、一般観覧者、小中学校生徒・青年団体の3つに大別し、それぞれの宿泊計画を立てた。事前調査として、区内の旅館や下宿屋すべてに対して収容人数の調査を行い、設備の拡張や改善等の指導を行った³⁶。また不足に備え、区内の寺院、劇場、寄席、料理店、学校を宿泊所として利用する準備を進めた。

博覧会会期中の宿泊施設確保の問題に対して、阿部札幌区長は、札幌区在住者で比較的設備の整った家出身地が同郡または同県の来観者を割り当て宿泊させるという提案をしていたが³⁷、実際に札幌区協賛会が立てた計画は、

来賓者を旅館や札幌区の有志家の家へ、一般観覧者を旅館や下宿屋へ宿泊させるというものであった。小学生徒・青年団体に対しては、廉価かつ充実した内容の宿泊所が必要であるとして、「区立西創成尋常小学校(南3条西7丁目)」と「豊水尋常高等小学校(南8条西2丁目)」の2か所の学校を、共同宿泊所の施設として充当した。札幌市公文書館の施設は旧札幌市立豊水小学校の校舎を利用しているが、豊水尋常高等小学校はその前身となる学校である。宿泊料は一人50銭で、一日あたり2000人を収容する計画であった。宿泊所として利用ができるよう、畳や食器等を用意し、寝具は旧陸軍第七師団より3000枚を借り入れた。博覧会会期中の宿泊人数は西創成尋常小学校が2703名、豊水尋常高等学校が1万9240名、合計で2万1943名であった。【資料15】は地図上にそれぞれの学校施設の位置と、博覧会の会場の位置を示したものである。

② 従業員の育成

博覧会顧問の菅野氏は、札幌を訪れた来賓や一般観覧客に最も接触する機会が多いのは旅館や飲食店、各種交通機関で働く者であるとし、観覧客に不快感を抱かせないよう、従業員に礼儀や知識を教育するとともに、自身の仕事についても熟練させておく必要があるとしている³⁸。札幌区協賛会は、菅野氏を講師として旅館の従業員に向けた講演会を行った³⁹。講演タイトルは「旅館応急改善法」で、礼儀作法や言葉づかい、所作などの接客マナー、準備すべき設備、衛生などをテーマに札幌時計台にて3日間行われた。この講演の中で、観覧客をもてなすためには、従業員は博覧会の3会場すべてを見学し博覧会についての知識を身に付けておくことや、道庁長官や札幌区長の名前、札幌の名所など札幌や北海道についての基礎的な知識を身に付けておくことも必要であると言及している。

(2.2.3 名所・旧跡を紹介する図書・絵はがきの刊行)



資料16 『札幌要覧』
サイズ: 18cm × 10.5cm

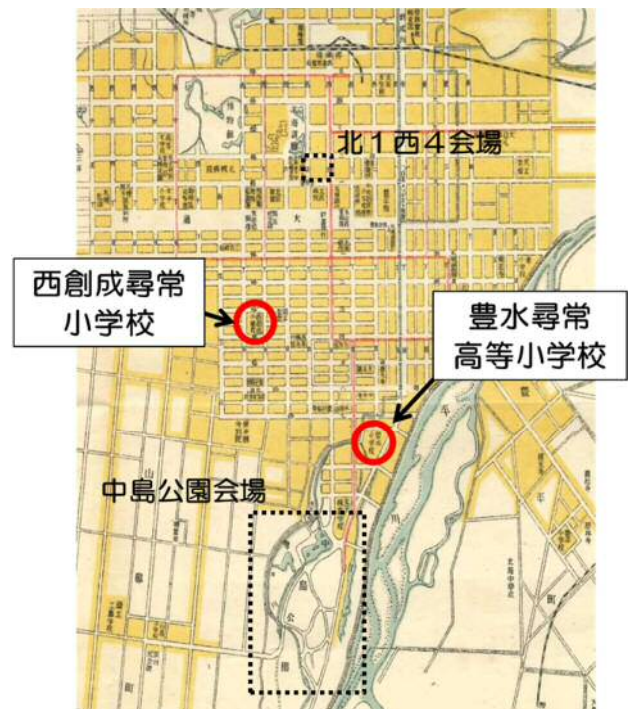


資料17 『札幌案内』
サイズ: 19cm × 11cm

博覧会の前後は、札幌へ道内各地方や道外からの学生の見学団体や各種の視察団が訪れることが予想された。博覧会顧問の菅野氏は、不案内のために市街の十分な視察ができないことは視察に来た団体のためにも札幌区のためにも有益にならないとし、僅かな時間でもできる限り有利に視察ができるよう、都市の案内や施設の説明の実施、重要施設等の場所や特徴を教示するための整備が必要であると説いた⁴⁰。北海道博覧会協賛会は見学や視察に供する施設を選定するため、道内の名所・旧跡の調査を行い、紹介すべきと認められた施設に関しては修復や補修をするよう呼びかけを行った。それらの名所・旧跡は、写真帳や旅行案内、絵はがきなどに掲載し紹介された。閑話では、北海道博覧会協賛会や札幌区協賛会の刊行した図書と絵はがきを紹介した。

② 記念絵はがきの発行

札幌区協賛会は、北海道博覧会協賛会の絵はがきの制作と販売を引き受けた。完成した3枚1組の絵はがきは来



資料15 小学生徒・青年団体宿泊所を設営した学校施設の位置図(『札幌案内』掲載地図に加筆)

博覧会の前後は、札幌へ道内各地方や道外からの学生の見学団体や各種の視察団が訪れることが予想された。博覧会顧問の菅野氏は、不案内のために市街の十分な視察ができないことは視察に来た団体のためにも札幌区のためにも有益にならないとし、僅かな時間でもできる限り有利に視察ができるよう、都市の案内や施設の説明の実施、重要施設等の場所や特徴を教示するための整備が必要であると説いた⁴⁰。北海道博覧会協賛会は見学や視察に供する施設を選定するため、道内の名所・旧跡の調査を行い、紹介すべきと認められた施設に関しては修復や補修をするよう呼びかけを行った。それらの名所・旧跡は、写真帳や旅行案内、絵はがきなどに掲載し紹介された。閑話では、北海道博覧会協賛会や札幌区協賛会の刊行した図書と絵はがきを紹介した。

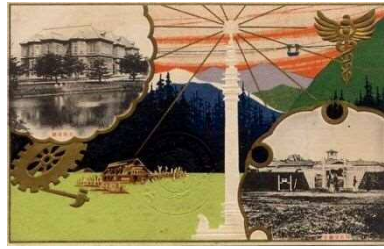
① 図書の刊行

札幌区協賛会は、札幌の名所や旧所をはじめ札幌区の沿革、産業、教育、交通、経済などを紹介するため、『札幌要覧』と『札幌案内』の2種の図書を作成し、来賓に贈呈した(【資料16、17】^{41, 42})。発行部数は、『札幌要覧』が3000部、『札幌案内』が5000部であった。どちらもポケットサイズで、特に『札幌案内』には札幌の市街地図⁴³も掲載されており、ガイドブックのような役割も果たしていたのではと推察される。

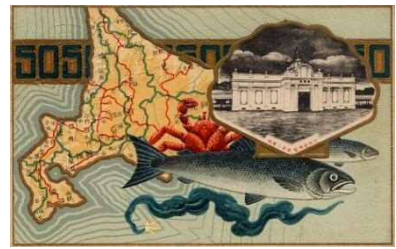
賓贈呈用として8000部を無償に納付し、その残部は一般に向けて販売を行った(【資料18、19、20】^{44, 45, 46})。



資料18 写真中央は博覧会第一会場(中島公園会場)。写真右上は道庁長官・依孫一氏肖像。



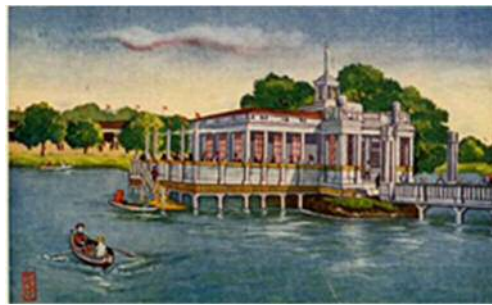
資料19 写真左は北海道庁。写真右は開拓使庁舎。



資料20 写真は博覧会第三会場(小樽会場)。



資料21 告知用のチラシのデザインを流用した絵はがき。中央に描かれているのは開拓の女神像。



資料22 第一会場・中島公園内の池に建設された迎賓館。

北海道博覧会協賛会は他にも、博覧会 PR のための広告ポスターやビラの絵図(【資料21】⁴⁷)と、中島公園会場の迎賓館を描いた絵図(【資料22】⁴⁸)を使用した絵はがきを2枚1組で発行し、道内外に向けて販売を行った。絵はがきの購入は予約制で、申し込み順に配布したのち、売店にて一般販売を行った。この絵はがきは札幌区内でも大変人気があり、丸井



資料23 写真中央は大通公園。写真右上は札幌区長・阿部宇之八氏肖像。



資料24 写真左は豊平館。写真右は札幌区役所。

呉服店は夏服売り出しの際の景品として使用するためにと申し込みを行っている⁴⁹。

また、札幌区協賛会でも2枚1組の記念絵はがきを発行した(【資料23、24】^{50, 51})。絵はがきには、大通公園や豊平館などの札幌区内の名所・旧跡の写真が使用されている。エンボス加工や金泥・銀泥が施された豪華な意匠であり、どちらにも札幌の徽章が中央にデザインされたエンボススタンプが押印されている。記念絵はがきは1組10銭で販売し、総売上高は2100円に達した⁵²。これらの絵はがきは、博覧会場内の特設売店で販売された。【資料25】⁵³は絵はがきを販売し

ていた、維新堂の新聞広告である。

開道五十年記念北海道博覧会の記念絵はがきは様々な団体から発行されており、当館も複数種の絵はがきを所蔵している。それらには会場内の施設や風景の写真や絵図が使用されており、当時を知る貴重な資料の一群である。また、絵はがきには記念スタンプが



資料25 博覧会場内に設置された特設売店 維新堂の新聞広告



資料26 博覧会記念スタンプの意匠

捺印されているものが多い。北海道通信局は、博覧会場内に開

設した臨時郵便局や絵はがきの売店に、記念スタンプの捺印所を設置している⁵⁴。さらに、開会式・閉会式、その他の式典ごとにも、それらの会場付近に臨時のスタンプ捺印所を設けた。閑話では参考までに、新聞に掲載された記念スタンプの意匠を紹介した【資料26】⁵⁵。

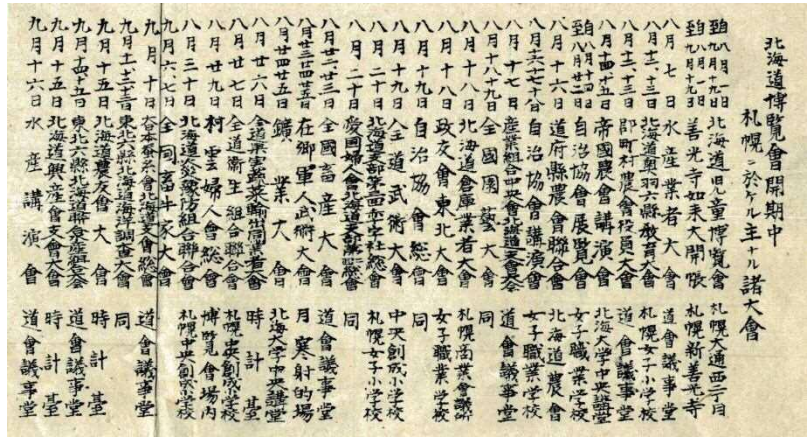
(2.2.4 大会の開催の勧誘やその補助)

札幌区協賛会は北海道博覧会協賛会と協力し、博覧会会期中の札幌区内での産業、学術、宗教その他各種大会の開催の勧誘を行った。これは、大会参加者を誘導することによる博覧会の観覧客の増加や、専門性の高い大会へ区民が参加する事による産業振興と技術や学術の向上を期待した事業である。一部の大会には補助金を交付し助成を行った⁵⁶。【資料27】は、当館所蔵の地図「開道五十年記念北海道博覧会案内」⁵⁷に紹介されている主な大会の一覧である⁵⁸。例えば、8月1日～9月19日には

北海タイムス主催の「北海道児童博覧会」が札幌大通西2丁目で行われている。さらに、8月14、15日には「帝国農会講演会」が北大中央講堂で、8月17日には「産業組合中央会北海道支会大会」が道会議事堂で、8月19日には「全道武術大会」が中央創成小学校で行われた。

現在、このような事業は「MICE」という名称で、経済政策、観光政策のひとつとして実施されている。MICE(マيس)とは Meeting (企業等の会議・研修・セミナー)、Incentive tour (報奨旅行)、Convention/Conference(大会・学会・学術会議・国際会議)、Exhibition/Event(展示会・イベント)の頭文字を取ったもので、多く

の集客が見込まれるビジネスイベント等の総称として用いられる言葉である。会場を提供することで、景気変動に左右されずに都市に安定した集客が見込まれ、また、文化イベントに市民が参加することで都市の文化水準を高める効果の期待も高い。札幌市では平成22年(2002)11月に「札幌 MICE 戦略」⁵⁹を策定している。大正7年当時より、MICE 事業に通ずるような先駆的な取り組みが行われていたことがわかる。



資料27 地図に掲載された大会一覧。
「北海道博覧会開期中札幌における主なる諸大会」。

[3. 大正7年の博覧会が札幌に残したもの]

(3.1 博覧会の入場者数)

開道五十年記念北海道博覧会は大盛況のうちに幕を下ろした。【表3】は『殖民公報』第105号⁶⁰を参考に作成した、博覧会入場者数の一覧表である。3会場の総入場者数は142万3661人で、札幌会場だけでも100万8118人の入場者を数えている。大正6年末の北海道の人口が208万人余り、札幌の人口が9万5000人に満たなかったことを考えると、その盛況ぶりが伺える。

【表3】

博覧会入場者数(人)

会場	昼間	夜間	一日平均	計
第一会場	480,971	193,063	13,481	674,034
第二会場	334,084	—	6,682	334,084
第三会場	344,789	70,754	8,311	415,543
計	1,159,844	263,817	28,474	1,423,661

(3.2 博覧会が札幌に残したものとは)

大正7年に行われた開道五十年記念北海道博覧会は、当時の北海道における最大規模の博覧会であった。博覧会に向けて行われた事業によってもたらされた利益は、札幌の都市や区民に大いに還元されることとなった。電車の整備や、商店や旅館等の改善、清掃事業等によって札幌の都市機能の向上がもたらされ、札幌区民へ向けた各種の講演会や講習会、大会への参加は市民が知識や教養、技術を身に着ける機会となった。さらに、博覧会によって自分たちの住む都市を知り都市の美点を意識する機会が与えられたことは、区民の心に公共心や自治心を芽生えさせると同時に「札幌区民としての意識」の形成のきっかけとなったであろう。

また、来札者の指摘によって、都市整備の不備や区民の応対等に関して解消すべき新たな問題点や改善点が浮き

彫りとなった。例えば、北海タイムスに掲載された道外の記者による記事⁶¹では、都市や博覧会に対する案内の不備、旅館の応対の悪さ、鉄道汽船等の交通機関の混雑などが指摘されている。これらの解消に向けた新たな事業を実行することも、札幌の都市発展の後押しとなったはずである。開道五十年記念北海道博覧会がもたらしたこれらの要素は、その後の札幌の都市発展の原動力となったのではないかと筆者は考える。

[4. むすびに]

最後に、北海タイムスに掲載された菅野眞氏による「内地へ土産に 札幌の誇り」という記事を紹介した⁶²。以下に一部を引用する。

札幌には誇るべきもの数々あろうが予は自分の専門の立場から見た札幌の誇りを少し挙げて内地へ帰る人々の土産に紹介したいと思う […略…] 大通の花園の周囲には極めて低い形式計りの囲いあるのみで其中に種々の美しい花が誰に手折られる心配もなくさも自由に咲いている有様は其半面に於て区民の公德心の発達を語るものである 花の美しさよりも花を愛し公德を重んずる人々の心の美しさが偲ばれてうれしい、垣の高きものを要しない所以である、是札幌の一大誇りである […略…] 札幌を見に来られる人々は大通の花の安全と垣の低い所以を見て之を土産にされたい 猶札幌の人々に望むのは此上とも札幌をして美しい都市にされたい事である […略…]

この時、菅野氏は博覧会顧問として約3か月間札幌に滞在していた。新聞では札幌の都市の美点を挙げ区民の自重を祈ると共に、他都市に向けて札幌の都市の実態を知り都市改良の参考に役立ててほしいと語っている。

開道五十年記念北海道博覧会が札幌にもたらしたもので一番重要なものは、札幌に住む人々の中に「札幌区民としての意識」や「札幌に対する誇り」が生まれたことであると筆者は考える。先人の思いが札幌の発展をもたらし、また、その思いが今日まで継承されてきたことが、現在の札幌の都市の姿を形作った一因となったのではないか。では、今を生きる私たちが、次の世代へこの思いを継承するためには何が必要か。この問いに対して、筆者は「記録」が重要な意味を持ち、また、公文書館の使命である「記録を残すこと」と「記録を読み解き伝えていくこと」がその役割を果たすのではないかという意見を述べ、閑話のむすびの言葉とした。

おわりに

本稿では昨年度に行ったさっぽろ閑話の内容を、新たに資料や解説を補足しつつ紹介した。今回の閑話では、大正7年に行われた「開道五十年記念北海道博覧会」を札幌の都市発展のキーとなる出来事として位置づけ、博覧会に向けて行われた都市整備や市民に向けた取り組みによって札幌の都市や市民の心にもたらされた変化が、その後の札幌の都市発展の原動力となったことを示した。

大正期は全国的に都市人口が増加した時期であり、札幌もその例外ではなかった。さらに、技術の革新とそれともなう生活の変化に加え、大正11年には市制が施行され、札幌の市民生活や文化に大きな変化がもたらされた時代であった。また、大正期は市民活動が盛んとなった時期でもあり、開道五十年記念北海道博覧会の開催の提唱が民間組織である札幌記者倶楽部より発せられたことも、この時代背景によるものかもしれない。閑話では、こうした時代の大きな変化のまっただ中で行われた「開道五十年記念北海道博覧会」を通して、当時の札幌の都市や、市民のいきいきした姿を伝えることができたのではないかと思う。また、閑話の構成は参加者が当時と現在との結びつきを意識できるよう、導入部では電車の開設をとりあげ、[2]の札幌区協賛会の事業紹介では、店頭装飾講習会の講習内容を「札幌の景観色70色 一大規模建築物等色彩景観ガイドライン」を引き合いに説明し、大会の開催の勧誘やその補助事業では「札幌 MICE 戦略」を用いて解説を行うなど工夫した。会場には使用した資料をセッティングし、閑話の前後に参加者が自由に閲覧できる時間を設けたが、熱心に手に取る参加者が多数みられた。さらに、閑話の告知の前には、ラジオやテレビの取材や、閑話で使用した資料を展覧会で利用するための貸出申込などもあり、大きな反響をいただいた。閑話や本稿が、市民にとって開道五十年記念北海道博覧会の事はもちろん、札幌の歴史に興味を持つきっかけや、札幌市公文書館や当館の所蔵資料を知るきっかけとなれば幸いである。

今回の閑話は、開道五十年記念北海道博覧会の一端を解説したに過ぎない。博覧会の会場やパビリオン、展示物についての詳細や、博覧会関連の資料や絵はがきの図像解釈等の個別の資料調査、大正7年の博覧会を含む札幌

で開催された博覧会の比較検証など、研究すべきテーマは多数ある。これらの研究を今後の課題とし、その成果は次の閑話やその他の機会をもって市民へ提供していきたいと思う。

最後に繰り返すことになるが、筆者は博覧会当時に形成された「札幌区民としての意識」や「札幌に対する誇り」は、現在の私たちの住む札幌を形作った源となったと考えている。2018年は、開道五十年記念北海道博覧会が開催された1918年から100年目、つまり北海道の開拓から数えて150年目にあたる年である。都市と市民の結びつきを強め市民が地域の愛着を育む後押しとなるよう、また、札幌が街の個性を失わずに今後も発展をつづけることができるよう、これからも公文書館の使命を全うしていきたいと思う。

(札幌市公文書館専門員)

—注—

- 1 絵はがき「停車場通りをいく馬鉄」(No.2707)
- 2 札幌市交通局(1977)『さっぽろの足 写真でつづる50年』, p21～33、札幌市教育委員会編(1982)『さっぽろ文庫 22 市電物語』, p10～24を参考とした。
- 3 開道五十年記念北海道博覧会協賛会(1919)『開道五十年記念北海道博覧会写真帳』出典。
- 4 特定重要公文書「開道五十年記念北海道博覧会第老会場全図 其一」(No.2016-0452)
- 5 博覧会に関する説明については、山本光雄著(1973)『日本博覧会誌』を参考とした。
- 6 開道五十年記念北海道博覧会協賛会(1920)『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』
- 7 札幌市教育委員会編(1994)『新札幌市史』第3巻, p813～815
- 8 『北海タイムス』大正2年(1913)11月11日「記者倶楽部決議、開道50年記念祭」
- 9 『北海タイムス』大正2年(1913)12月11日「御即位式と開道記念(長官記者倶楽部委員会見)」
- 10 北海道庁(1920)『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』, p5～14。国会図書館蔵
- 11 前述『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』, p5～33
- 12 『北海タイムス』大正7年(1918)7月21日「開道記念祭挙行、式場内に於て」
- 13 『北海タイムス』大正7年(1918)8月16日「開道50年祭の盛儀、来賓無慮1千余名」
- 14 前述『開道五十年記念北海道博覧会事務報告』, p139～142
- 15 特定重要公文書「開道五十年記念北海道博覧会第二会場付近之盛況」(No.2016-0453)
- 16 前身は明治11年(1878)に北海道で初めて開催された博覧会といわれている「農業仮博覧会」で、明治16年(1883)に「北海道物産共進会」と改称した。会場は札幌と函館(のちに根室が加わる)で交互に設定され、毎年開催されていた。明治20年(1887)に開催場所を札幌区に固定し、中島遊園地内に共進会のための会場と事務所を設営した。
- 17 『北海タイムス』大正7年(1918)1月1日「博覧会と札幌区、来観者の収容、一交通機関一道路改修」
- 18 『北海タイムス』大正7年(1918)1月1日「北海道博覧会」
- 19 前述『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』, p183～192
- 20 『北海タイムス』大正5年(1916)11月5日「店頭講習勧誘」
- 21 『北海タイムス』大正5年(1916)11月2日「店頭裝飾講師決定」
- 22 『北海タイムス』大正5年(1916)11月11日「店頭裝飾講習、▼第一日盛会」
- 23 『北海タイムス』大正5年(1916)11月15日「店頭裝飾講習、▽本日は物産陳列場」
- 24 絵はがき「(札幌)マル井今井呉服店札幌支店」(No.2574)
- 25 絵はがき「今井呉服店階上陳列の一部／博覧会第一会場全景／博覧会第一会場正門」(No.3043)
- 26 絵はがき「今井呉服店階下陳列の一部／博覧会第二会場」(No.3042)
- 27 『北海タイムス』大正5年(1916)11月14日「店頭裝飾に就て、▽菅野講師談」
- 28 詳細は、札幌市企画調整局計画部都市計画課都市景観担当編(2004)『札幌の景観色70色 大規模建築物等色彩景観ガイドライン』を参照。
- 29 『北海タイムス』大正7年(1918)6月4日「博覧会と市街裝飾、道博顧問菅野眞氏の談1」
- 30 絵はがき「開道五十年記念北海道博覧会 札幌ステーション前歓迎門」(No.6601)
- 31 『北海タイムス』大正7年(1918)5月9日「決定した裝飾原案、一番壮麗なのは停車場通り」
- 32 前述『北海タイムス』大正7年(1918)5月9日
- 33 絵はがき「開道五十年記念北海道博覧会、第二会場、工業館」(No.3358)
- 34 『北海タイムス』大正7年(1918)6月4日「博覧会と市街裝飾、道博顧問菅野眞氏の談2」
- 35 『北海タイムス』大正7年(1918)7月26日「道博開会と市街撒水、菅野道博顧問談」
- 36 『北海タイムス』大正7年(1918)6月5日「区協賛会の接待振」
- 37 前述『北海タイムス』大正7年(1918)1月1日
- 38 『北海タイムス』大正7年(1918)5月31日「博覧会歓迎振(上)何うして失態や欠陥を防ぐ」

-
- ³⁹ 『北海タイムス』大正7年(1918)7月17日「旅館の応急改善法 いかにか遠来の客を遇するか 菅野真氏の講演2」
- ⁴⁰ 『北海タイムス』大正7年(1918)6月19日「札幌では是非必要な団体視察案内、今の儘では視察は無意味」
- ⁴¹ 札幌区協賛会(1918)『札幌要覧』
- ⁴² 札幌区協賛会(1918)『札幌案内』
- ⁴³ 『札幌案内』掲載の市街地図は、本稿【資料3】、【資料11】、【資料15】で使用した。
- ⁴⁴ 絵はがき「北海道博覧会第一会場／俵会長」(No.3008 ほか)
- ⁴⁵ 絵はがき『開拓使庁舎／北海道庁「開道50周年記念北海道博覧会」』(No.3016 ほか)
- ⁴⁶ 絵はがき『北海道博覧会第三会場「開道50周年記念北海道博覧会」』(No.3022 ほか)
- ⁴⁷ 絵はがき「開道五十年記念※ポスター 北海道博覧会」(No.3066 ほか)
- ⁴⁸ 絵はがき「北海道博覧会第一会場(迎賓館) 北海道博覧会」(No.3072 ほか)
- ⁴⁹ 『北海タイムス』大正7年(1918)5月31日「道博の広告ビラ、協賛会では広告絵はがき」
- ⁵⁰ 絵はがき「※大通公園 開道50周年記念北海道博覧会」(No.2985 ほか)
- ⁵¹ 絵はがき「※区役所／豊平館 開道50周年記念北海道博覧会」(No.2994 ほか)
- ⁵² 前述『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』, p186
- ⁵³ 『北海タイムス』大正7年(1918)8月1日「〔広告〕維新堂売捌店」
- ⁵⁴ 『北海タイムス』大正7年(1918)8月1日「記念スタンプ」
- ⁵⁵ 『北海タイムス』大正7年(1918)8月2日「開道50年記念 記念スタンプ」
- ⁵⁶ 前述『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』, p186～187
- ⁵⁷ 地図「開道五十年記念北海道博覧会案内」(No.545)
- ⁵⁸ 大会についてのより詳しい一覧は、前述『開道五十年記念北海道博覧会協賛会事務報告』, p103～109、p186～187 や、『新札幌市史』第3巻, p669～670 を参照。
- ⁵⁹ 札幌市 HP 「MICE 総合戦略の策定について」参照。
<<http://www.city.sapporo.jp/keizai/kanko/mice/senryaku.html>>
- ⁶⁰ 北海道庁(1918)『殖民公報』第105号, p51
- ⁶¹ 『北海タイムス』大正7年(1918)9月24日「時言 内地人と道博」
- ⁶² 『北海タイムス』大正7年(1918)8月22日「内地へ土産に札幌の誇道博顧問菅野真氏談」